



雪は消えて春日は来る
 友方も多かる
~~雪は消えて春日は来る~~

雪と春と能く

目馬御風

〇

「六七にも積つてゐた雪が、いつの間にかす
 つかり消えてしまつた。雪が解けるあ
 とから少し全くなかに気がおれあに、或は雪
 ぬし、或は大地に吸ひこまれ、或は流れ去つ

深く積つ
 た雪

て、とうして無くなるか解らぬ中に無く
 あつてしまつた。私はずこ二人おち
 事を何かにつひひに書いたやうに言
 まつた~~雪が~~、不思議な物や
 らに静かに消えてゆくものや。いつの間
 に消えてしまつた。二人おち
 雪を毎年、新らしく感じあひあはれぬは
 らに、それは人間の情に
 くらしや。
 雪の大地
 方の人達の心から、私

雪の大地

解れぬ静けさ
 大地



幸はよくこんを疑問を要ける。

こんあに澤山の西が一時にはえ出したら大
変なことにありませんか。毎年こんあに澤
山西が積つて、それよりく洪水にあいもの
あすね。

いかにもこれはたも疑問である。純粋のま

い人の眼で見たらあ、さうした不安の伴ふの
も無理はない。ゆれといふ、暫くに往みあつた

遠はそんな不安を並にも感じたことばあ。
~~遠はそんな不安を並にも感じたことばあ。~~
ゆれといふ、暫くに往みあつた

こゝろ。

これはあつたの降り積るつに對しても同じであ

る。又にあつて始めてあつたかやまも積る

毎年同じかうに私達は懐いて、それを揺るがし別け

て道をつけたりますか、一人積り二人積りだ

ん、深くあつてゆくにつれて、私達の心も

一日と二日に對して平氣にあつて行く。どう

にも仕舞かあいとこゝろあ氣にあり、いくらあも

降りたいたい降り積りたいたい積るかいさ
とこゝろあ氣にある。本~~の~~冬に教りらしい各付し

(御風用箋)

いた気持のして来るのも、さうさうつてからで
 ぬ。さうして、~~ま~~うそのに、~~ま~~誰一人寒く
 て困るとか、「こんちにやが積つてうなるの
 らう」さういふ者が多くある。むしろ人々
 は、~~あ~~このおむねで屋敷の生は、~~あ~~おちつ
 ち、の出来事、~~あ~~ことをききん、~~あ~~いよくこれから
 が本々の体から、~~あ~~「とらったやうな気持に
 なる。」~~あ~~良きおむねの歌の
 あしらの國上の山の冬ごもり、日ニく
 せの、~~あ~~に、~~あ~~往き来の道のあつとさ
 へ、~~あ~~のさへ人の高もあし、うま世をこ
 こに明して、ひたのたぐみかうつ線、
 たか一すいの山清水、そをいつるに、あ
 ら玉の、~~あ~~にとしのけりくらしつるは、
 さあなげと、~~あ~~のたぎつるやあな
 ち、~~あ~~のみゆさなりつてもさし
 かうした、~~あ~~しい安らかなさも、~~あ~~往來の道の跡も
 へ、~~あ~~え、~~あ~~に、~~あ~~しり、~~あ~~積つた上をあけぬ
 は、~~あ~~あいのひを。

「こんちにやが積つてうなるの、さうさう
 づかむ」
 (御風用箋)

4 4

にも仕様があら——
 始め人々の気持が、本意に冬を越えりし
 いせらかき~~を~~得る。やがの内部が急にはのほの
 とした温かさを吐いて来る。天候の陰悪
 や寒気の烈しさをいか問題にさめよくある。
 年のことではあるが、私はさうした気持の
 推測そのことについて何かと考へさせられ
 するのである。
 今もそれはそのことについていろいろのこと

を考へてゐるうちに、ふと数年前の海濱の
 海濱と云つたこともいしほらの激浪に怒を
 時のことを思ひあつた。その頃東京の友人
 一宛て書いた牛紙に、
 まの~~こと~~を~~書~~いた~~こと~~あつた~~こと~~出~~た~~こと~~は~~。
 「……先頃此の地方一帯が、恐ろしい
 海濱に怒をくれた者のことば、君も新南や
 何かいほい知られたことと思ふ。借つて
 て初めてあんな猛烈な風浪に出遭つたのは、
 一時はひどく怖ろしかった。文通村通信

閉

(字十二行十二)

榎園は一時全く杜絶したの心、~~他~~の地才の
 榎子は知れあつたか、借りのところぢや
 も随分さすまじい芝居あつた。浪は町中へ
 ますもがやん入ん。川とてふ川は全部に
 か砂で埋つたので、山崎りの方からは出
 か攻めあげて来た。碓氷の途は全くさきか
 れてしまつた。電燈は二晩とてふものは全
 くつかふくなくなり、ランプもわんざの危険があ
 るの心^点すことか出まふ、^十大暗ぶ家の中で
 辛ういこつけられた^{蠟燭}の明りの周囲へ家分

族一同か頭を集め、身をちいめて、二晩と
 てふもの全く眠らぬに夜を明かした。絶え
 ぬあい^暴風^雨に、家は今にも^瓦落ちる^かと
 はかりに、^物壊^れい^{ゆる}を^立て、^櫓れ^つい^けぬ。
 子共や女や老人は外へ出ようにも出らんを
 あつたか、若い男女はそれをも急^ぎの防^波
 工事のなかや、浪と共水との模様を見るた
 めに、^外へ^出て^働い^{たり}、^足廻^つたりし
 た。事^態は^刻々^に危^険に^陥つ^て行^つた。し
 かし、^葉の^散り^やは^あか^つた。それ^を

(御風用箋)

せめのうもほ暗うろた^{え廻った}り、びへたり
 して、たゞく^く恐怖の捨とあつてめたのび
 をあか、いつとあしに人々の心には一種の
 沈んた静かよ諦めのやうま^あおちつよか也
 て来た。立りわめいて居た子供等さうと、
 書は静かさいい^静と^動動機との中へ遊ぶ^静静か
 夜は物凄口の暗いと^静静機との座に
 眠るやうにあつた。かゝして荒れ狂つた世
 界のうら^静に、一極の^静静機を^静静けさか、いつ
 とあしに感いられるやうにあつた。

けさな戸外へ出て浪と嵐と^静静して倦いて
 おる者にも、いつとあしに感いられるやう
 にあつた。人々はあわてよくあつた。あせ
 らあきあつた。怖れあきあつた。あせよく
 あつた。

その動乱の座に感いられた一種の^静静機を^静静け
 さ。一^静静機の^静静機とあつた。あつた。
~~静機とあつた。あつた。あつた。あつた。~~
 静の^静静機とあつた。あつた。あつた。
 静の折れの^静静機とあつた。あつた。あつた。
 静の折れの^静静機とあつた。あつた。あつた。

静の有あし^静静機とあつた。あつた。あつた。

7

一 仕事を、私はいふこととは出来あひ。辞職
 の途の全く終えてしまつたあの怖ろしい
 の ~~威嚇~~ 下にありあがり、心うして ~~私達~~ 自
 のやうに ~~お静~~ かお安らかお気持ちに住す。ことが
 出来たのらあらう。常時にあつたさへ時には
 一寸した事を気にして眠ることの出来あひ夜
 のあるやうな ~~私達~~ が、あれほどの危険に
 さらされたのらあらう。 ~~あつた~~ ところのやうな ~~穏~~ やかお眠を
 得られたのらあらう。 ~~あつた~~ ところのや ~~醒~~ うあ
 力 ~~私達~~ の心に興へたのらあらう。

私は更にあの場合こんなことをも友達に書
 き送つた。
 「僕は ~~多分~~ ^{多分} 此の地方の人々には、一歩に現世の
 苦悩に對す。根強い忍従性と、運命に對す
 る不思議な ~~あつた~~ かつちりした一種の ~~あつた~~ けりに
 近い ~~辛~~ 精神 ~~あつた~~ ことか ~~あつた~~ しい ~~あつた~~ 特 ~~あつた~~ を示してあつた。
 と ~~あつた~~ 仕事を ~~あつた~~ した ~~あつた~~ 仕事か ~~あつた~~ かつ、 ~~あつた~~ ほんはとり
 わけ此の辺の ~~あつた~~ 師の ~~あつた~~ 向に ~~あつた~~ なる ~~あつた~~ かわりに ~~あつた~~ 見え
 る ~~あつた~~ かつちり。 ~~あつた~~ 無 ~~あつた~~ 地を ~~あつた~~ 割れ
 て行く若者 ~~あつた~~ かつちり ~~あつた~~ 多 ~~あつた~~ かつちり ~~あつた~~ 生 ~~あつた~~ かつちり

(御風用箋)

12書

れども、概して之は強等は此の荒海を相
 争としたまはれを持續して行くことに一極の
 委曲を感じてぬ。やうにさへ思える。先頃
 のあの海津の騒ぎをうけて今年のをくらぬ海
 荒れの日の経いた年は、此の数十年前よりも
 よかつた。と云はれた。心あるが、やうした
 永い不景期に遭遇しても、強等は一向に海
 に対して委曲をうかすあつた。おにはこ
 んなこともあつた。かといふやうなあつた
 いた。度、うろたえおに風を待つたけ

の根強さを強等のさへは持つてゐる。それ
 心のは必ずしも、あかりると、もしか、
 かいても、仕方があるといふ。その引きだ
 らぬ方ではあつた。借(借)極めをば
 強等のさうした。持た、から強等の
 強等のさうした。か、心、持た、から強等の
 まつたく、さうした。根強いの力は、どこか
 うといふ。自然に對する。して出た。あつた。
 何が、さうした。あつた。あつた。
 は此の問題に、あつた。あつた。あつた。
 (字十二行十二)

風用

自分の方から運命を征服したのでもあらう。一
種不可思議な微妙な心境であらう。

○
私は健康

控へてゐる。時あたりに、

病氣にでもなつたらう。からうと云つた

甘う不安を感じることがある。ところが

障病

あつた。気があつて、
く。いぢやないか。あつた。仕事がいくらあつても、
妙にそれらに気がかゝらなくある。あなた

しに、
ゆるんだ心の状態であつた。積極的に運命
を乗り切ると云つた。甘う不安な状態であつた。

らあ、心算が南に、
は、あ、い、夜に、
は、進、る、目、の、汗、を、拭、く、に、
一、晩、ら、う、の、眠、れ、さ、く、た、つ、て、
あ、や、い、ち、抜、け、出、した、気、持、ち、
あ、の、出、来、る、

目か汗を拭く

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、
何かに反して、
何かの具合に、

(御風用箋)

る意は、^{いかに}深くたぐらるる。

或人かひとい怪我をして或醫を師の牛街
をまよせた。始めのうちは気がいくらか遠くお
つてゐる女にさよふに痛やを感^いか^つたか、
時間を延ぶにつれて痛やが^ま激しくな
つて行つた。彼はその苦痛を^醫師に^言つて、
どうかしてくれと哀願した。醫師かともう
施すおけの術を^施したのだから、何ともし
て見ようかあかつた。患者は^苦痛を^忘れるるあ
に^睡り^果るも^死して^せら^るる^かと^軽ん^だ。こ

かし、それはあつる危険なことだと^二ら^おので
斥けられた。患者はこころに^苦痛を^堪へ^てま
へも^生き^ませ^けれ^ばお^らぬ^かと^まる^言つた。彼
は^れう^とろ^とその^苦痛に^は堪^へら^れさ^うに
はあかつた。その^時に^醫師は^たし^め中^にか^う
言つた。
「我々が出来あかつたら^はは^らさ^さい。もうか
うあつては^はら^いて^ぬより^外に^しか^うか^あ
い。は^らさ^さい、は^らさ^さい。甚^だお^心せ^ちに
立^はら^ささ^い。」

(御風用箋)

(字十二行十二)

事その瞬間、思ふ者は不思議の非常強い力を
持たせうに見えた。急に心か安らかにあつた
かうに見えた。やがて眠りが強~~く~~を誘つた
のであつた。
事此の語を聞いて私は「さうほつと」と思つた。
いかにもその醫師はうまいことをさつたもの
であらう。たしか、その醫師はとておかしな
置いて、そんなおまをさつたのはあつた。
醫師にとりてもその場合さうでもさうぶつ外
に仕様があつたのであらう。それは強とし

これも困りぬいた果にあら言葉であつたらう。
即ちそれは思ふわくの一切を絶して扱出した
心から出た声であらう。慰めても慰めて
その度~~に~~切れぬ、説き聞かせても説き聞
かせても説き聞かせぬ——その困り扱
た気持から、何れか扱出さつたりさつ
てのけたのか、その言葉はあつたらう。そし
てこの場合に於ても、さうさつたらば思
考もあつたらう。かゝるさうさつたらば思
考もあつたらう。かゝるさうさつたらば思
考もあつたらう。かゝるさうさつたらば思

(御風用箋)

くして醫師その人も自らの其の言葉によつて
 救はれたのひあらう。我情が出来あかつたら
 立いてあつたことば、一寸と聞くと
 不人情のやうであつたが、しかしその場合に於
 てはこれ以上は同様のことをた言葉は他に
 あつたのひあらう。それは如何に言つても
 愚の即ちあつたやうの極であつた言葉である。
 按ずる言葉、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
 十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、
 二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、
 三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、
 四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、
 五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、
 六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、
 七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、
 八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、
 九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、

得た。その瞬間に於ける醫師の心持と、
 心持と、共にいふべきかの思ひを待つてお
 ちかつた。それは却て心持の心とく、自然
 との心とく、心とく、心からあつたにち
 かひない。
 以上は、
 〇

以上は、
 〇

(御風用箋)

「我」の出来あつた立いてゐる。かいいかう
 なる。醫師の言葉によつて、^たた如として不思議
 あ心の安らかなるを得たと云ふ此の患者の心持
 の轉換は、^{蓋し}これを自力による^救救と見ること
 か出来まいと同時に、また偏に他力による^救救
 ひと見ることとは出来まい。その言葉は醫師
 その人にとりては如何に^救救めても^救救め切れな
 いせつあきの極まつた刹那の青いあり、患者
 その人にとりてはそれは如何に^救救めても^救救め
 ることの出まい^救救しい^救救しいその極まつた刹那に^救救

げられた天来の福音であつた。それは^救救と^救救
 とりて^救救の^救救ひであつたと^救救い^救救、同時に、^救救
 患者にとりて^救救の^救救ひであつた。即ち^救救した人
 と、^救救あつた人と、双方とも^救救の^救救ひかけを
 いふ言葉によつて、^救救ひかけあひ^救救ひを得たの
 りあつた。此の場合双方とも^救救上意^救救によつて
 は動いてゐるあつた。いかに^救救自己の^救救亦双方と
 もに無關心であつた。此の場合の二
 人の關係、^救救此の場合の二人の^救救心^救救境——それは
 實に^救救不可思議^救救の^救救境^救救地^救救であつた。

（御風用箋）

「出来るわけのことはもうやりつくしてしま
つた、その上とんまに苦しくてもそれはどう
でもあらあ、堪へられあかつたら立いてい
あゝかいろ。こんあ風に云ひ却つてしまつた
醫師の心には、その堪へ何の思わくもあかつ
たに相違ない。それは思わくもあゝ者には
とてこれか、^{る言葉}はあゝい。又それは一寸~~考~~
へると冷淡あやうであるが、しかし冷淡あ心
は^か苦しくは決して立いてゐるかい、~~さ~~
い、~~さ~~さ言葉は出て来る~~さ~~あゝい。

は實に同様の極つた心の底からの叫びであ
た。世つあさの極^我知らぬ^我飛せられた、^我飛
た後^{それ}は^我あから一極の^我馬をさへ感したら
く思われるやうあ、^我不^我思^我言^我言葉^我あゝい。
「^我堪^我え^我ま^我あ^我あ^我つ^我たら^我立^我いて^我あ^我ゝか^我い^我—
それは苦しくんあゝい。堪^我え^我者^我その^我人^我にとりては、
あゝいにあたりまの言葉あゝい。立いて苦
痛が去るものあゝい、^我堪^我え^我は^我もう^我とう^我に^我立^我い
てゐた^我あゝい。さ^我堪^我え^我あ^我く^我こと^我と、^我自^我ら^我苦^我痛^我に^我堪^我
へられなくあゝい、^我あ^我の^我つ^我から^我立^我く^我に^我ま^我つ

(御風用箋)

てや。のた。現に徳はその場合の心からいへて
 めたのか。それにも拘りかあるまいか。一
 徳はその録りに明白な、あやりにある然る醫解
 の言葉によつて、不思議にも廓然とした心の
 安らかなさを得たの心であつた。その胸向に
 於ける患者その人の心を探る。あつた心
 心はいついふさふさおほさを持つてみたことであ
 らう。その心おまはあかり切つて、徳はそん
 だことをおめするの心はあい、それはあやりに
 に不人徳を言ひ草ではあいか。あせ徳はそ

の場合の心からいへて、あつた心からいへて
 う。あつた心からいへて、あつた心からいへて
 一あせ徳はそんを馬に及たしあつたの心
 らう。
 徳はあつた心からいへて、あつた心からいへて
 一あせ徳はそんを馬に及たしあつたの心
 らう。
 徳はあつた心からいへて、あつた心からいへて
 一あせ徳はそんを馬に及たしあつたの心
 らう。

(御風用箋)

(字十二行十二)

つたにうかひまい。真実は何とかしてやりた
いと云ふ心、真実を救はれたいと云ふ心、此
の二つの心はつひにとうにもあらまいとい
ふまで行くところであつた。しかし、そのとうに
もあらまいと思ふ、不思議にも二つの心はピタ
リと合つた。そしてここから期せずして
ほからぬお、安らかな世界が展開した。一
つの心の救はれが、同時に他の心の救はれで
あつた。救はれたやうに、しかし一切を言
んた言葉、一つの心から昇せられたか、期せず

して二つを心と同時に救つたのである。
それは決して極的であらぬ、あつた心持は
よかつた。あるかまの救はれであつた。
~~救はれた~~ ~~心~~ ~~の~~ ~~救はれ~~ ~~は~~ ~~あ~~ ~~つ~~ ~~た~~
救はれた。それは真実の自然のまゝの浄化
であり、有るがまゝの自然のまゝの救はれであつ
た。真実のまゝに救はれたもの、中に迷はられ
る、何の思ひくもよく真実を求め、不可思議な
救はれであつた。

(御風用箋)

○
 仙居寺一草のあらか書^るの品^の後の一草^にに
 人^を書^か書^らる^ると^ま。

他力信心々々として、一向に他力に力を入れて
 頼み修業は、遂に他力縁に縛られて自力地
 獄の端の中へ落ちんと陥り候。其の^故に、
 かかるやたあざ土凡夫を、^うつくしき黄蓮
 の膚にもし下されと、阿彌陀佛に押し^引入

に^引入^らばあしにして置て、はや五^劫は佛は
 みありたるゆゑに、^ある^る^る^るた^まも^もも、自
 力の強^まんたる^る候。問ひて曰く、如何
 やうに心得たらんには佛縁儀に叶ひ侍りあ
 りん。答へて曰く、唯ち自力他力あんのかの
^とり^ふ、あくた^まく^たを、さ^うら^りと、ち^りく
 らか中へ^入りて、さて後生の一大事は其^の身
 を如来の御前に^出せしめて、地獄ありとも
 才^もありとも、^あら^うた^まの^様の^御は^らひ^には^あら^ず、
 遊^はさ^り下^され^ませ^と御^頼み^申す^はあ^らず

(御風用箋)

伊央公論 説苑五

リ。斯くの如く決定しての上には、南無阿彌陀佛といふ口の下より欲の網をばるの野に、牛長鯉の行ひして人の目をあすめ、せしめる雁のかりそめにも、わか田へ水を引くは、あまかち作り声して念佛申すと及ぬ。是れ即ち佛は守りたまふよし。是れ即ち佛は守りたまふよし。六かゝり。

一 女おはまたこんよまをと書いてゐる。

「佛は時の星のまに由十九年の氷をさとり給ふともや。荒風夫のあつたことき、五十九年か向、開きよりくらきに迷ひて、はるかに照らす月影さへ軽ちほとのちからあふたまふ。氷をあらたまふとすれは、暗々然として、世の書をよむ、跡の跡らんとすに等しく、あまかち作りてはまよひをきねぬ。ゆに、説にいふ、世の書にけする書とあらしめば、あまかち作りてはまよひをきねぬ。あまかち作りてはまよひをきねぬ。あまかち作りてはまよひをきねぬ。」

(御風用箋)

(字十二行十二)

一茶の此の日記の多岐に及ぶについて、
井泉氏は毒てこんお風に示った。

「一茶といへば其の作に滑稽洒落を味ひの多
い事から、其の性格も普通には物に執着の
あいなるといふ風流人のやうに想像せられて
ゐるか、事實は之に反していふ所非常に執着
心の強い、物事に親密な性格であつた。此事
は七書日記や其他の遺稿を研究する者には
明らかだ。一茶の詳情を書いた故東松露翁
氏と其書を楷稿してゐる。一茶は其執着心

の爲めに、継母の義弟とは数年に亘る大
争ひ争ひしたり、郷党と云ふ所か合はぬ所
かあつた。「五十八年同暗きより暗きに迷
ひて」とか、たゞし「^か泪を改めんとせん」とか、
「^かてふ言葉のゆゑは推考ある事は出来ぬけれ
ども、一茶は自分の性癖としていふ所の執
から、その執着を脱つた後には暗い気分
を脱してゐたのではあるまいか」と思はれ
る。年上中にして自分か過去の生き方を總
覧する時、心おの胸には深い感慨があつたに

(御風用箋)

相違あり。然かもあは行まも思ひしして思ひの
 かはらぬ世を強ふ事をぬかしのみと云つて
 る。之はあきらめつたか、まよひたか、
 と、あきらめるといふ心持よりも、
 かつぱり有るが儘の自分かとして生かすか、
 いふ心持をさうしく思はれる。
 これは深い理解をもつた見方である。いかに
 も一世あは執の強い性根の人であつたらしい。
 そしてその強着の執着心ゆゑに、
 いけん人であつたらしい。絶えぬその執

着心中に強は鍵母とも相違ぬが、義弟とも
 違つた。その強着のゆゑに強は故郷の人々も
 も和することか出来ぬ、
 す。ことか出来ぬか、
 死に強は別れた事を嘆ひ、
 巡るあま、
 悪念のゆく憎んた。
 いれども一茶のその執着心には悔むべき事
 地獄さかあつた。思ふゆゑとか業累とか、
 そのか伴はあかつた。そんなには
 強の執着心

(御風用箋)

かころほむより、~~さ~~さくあはく、~~二~~天を
 てんく、かふりくくうあから、あな
 む子供の風車といふものをとるを、し
 り~~に~~かりてちつかりければ、とみにと
 らせや。かかて、あしかくしあつて
 捨て、~~一~~路ほとひの~~二~~草をよく、~~三~~直に外のものに
 こころ移りて、そこらにある~~二~~茶碗を打破り
 つく、それも直に使て、障子の薄紙をぬり
 くるとあはるに、よくたくと~~二~~葉をぬり
 誠と思ひ、まからく~~一~~笑ひてひたしりに

むしりぬ。心のうや~~一~~點の~~二~~塵をよく名月う
 むら~~一~~く~~二~~青く思ふれば、~~三~~道ふき仙傳を
 見るやうに、あか~~一~~く~~二~~心の~~三~~影を伸ぬ。又
 人の素りてめん~~一~~はとこ~~二~~にと~~三~~ら~~四~~は、大
 に~~一~~括し、~~二~~あ~~三~~く~~四~~はとこ~~五~~にといは~~六~~は、~~七~~鳥に~~八~~括
 さま~~一~~ま~~二~~ま、~~三~~直とより瓜~~四~~ま~~五~~ま~~六~~い~~七~~毒~~八~~文~~九~~に~~十~~は
 こ~~一~~あ~~二~~い~~三~~く~~四~~く、~~五~~いは~~六~~は~~七~~春~~八~~の~~九~~ほ~~十~~つ~~十一~~草~~十二~~に~~十三~~胡蝶~~十四~~の
 た~~一~~は~~二~~あ~~三~~る~~四~~、~~五~~あ~~六~~う~~七~~か~~八~~さ~~九~~しく~~十~~な~~十一~~ん~~十二~~男~~十三~~人~~十四~~を~~十五~~侍~~十六~~る。

(御風用箋)

足さういふかゝるものさういふことおくと、
 れるものから、朝は日のたやまのまゝにぬふる。
 その中はあり母は正月と思ひ、
 かたづけして、團圓のうら／＼けをさやして、
 闇には青のすゝを月のさめる相國とさるめ、
 牛のしこく抱き起して、うらの星にほせり
 て、乳屋をかへぬ、すはく／＼ひまから
 胸板のあちりをおたこまて、にこ／＼笑ひ
 をつくるに、母は長く胎めの苦も、日々襦
 袢の穢らしきも、ほと／＼わすめて、衣の

うらの玉を纏むるや、にあらまきりて、ひ
 としほきふ有様ありけらし。

又思の跡かへすなからにほしあ

何と云ふ純直お愛むの表白あらう。
 一に於てかくまひに海かよ優の歡ひに浸る
 ことの出来たゆは、却ての純直ゆゑに他方に於
 て、^{まはる}まはるくいさ幅、^{あや}あやの舎とあるのである。
 せよとわんはをいひかたし、遠ざくれば
 み、近づくれば不遠、さすかの聖人、
 息してありみ玉、かとは入たり。況んてま世

(御風用箋)

中央公論 説苑五

に於てを^中。老妻^{老妻}と云ふもの、片葉の
 芦の片葉地^地強く、己が身の長しあかにおも。
 心^心を、人の教みおぼ、うばの空^空風
 のや^やしとのや、^一守らあふとのや。
 小^小二人共に泥^泥の命^命あぬ。此^此三^三度
 目に^目あぬ、又^又前の通りあふこと、いと
 不便^{不便}に^になるの立^立るに^に等しく、^一物^物風^風
 とし^とせ^せし、^一母^母に^に押^押しつ^つあふ^あ、^一妻^妻
 し^した、^一か^か長^長妻^妻の^のよと、^一母^母を^を石^石と^とあ
 呼^呼け^ける。母^母に^に三^三つ^つい^い、^一此^此さ^され^れ石

西^西日^日も^も強^強て、^一る^る母^母の^の堅^堅石^石と^とあ^あの^のよと、
 必^必お^およ、^一北^北月^月の^の事^事あ^あの^のよと、^一日^日に^に4⁴度^度
 め^めけ^けるを、^一に^にあ^あ何^何し^したり^りけん、^一ま^まい^いて^て九^九十
 十^十日^日とい^いふ^ふ今日^日、^一朝^朝と^と北^北あ^あい^いて、^一か^かい^いの^の殺^殺
 こ^こぬ。あ^あは^はれ^れ今^今迄^迄嬉^嬉し^した^たに^に笑^笑ひ^ひた^たる^るも、^一中
 の^の意^意を^をあ^あう^う、^一甚^甚く^くし^して^て死^死を^を思^思ふ^ふも、^一あ
 思^思ふ^ふは^は石^石と^と殺^殺した^たる^るは、^一仇^仇の^の墓^墓に^に
 あ^あの^のう^う。か^かく^くい^いた^たに^にあ^あは^はい^いの^の事^事あ^あの^のよと、
 何^何と^とい^いふ^ふあ^あの^の事^事あ^あの^のよと、^一あ^あの^の事^事あ^あの^のよと、
 何^何と^とい^いふ^ふあ^あの^の事^事あ^あの^のよと、^一あ^あの^の事^事あ^あの^のよと、

(字十二行十二)

(御風用箋)

かゝらう。

此世、乳房を思ふを嫌ひて、十人の乳を
樽に漂く入れて、乳を吞まざる者似て、
かゝるに水をあてかゝりて、不思議
にも男の乳の如くに中よく、乳房らしき氣
けひ、ひたすらあらうが、さてこそ知れ、如
めより、乳の代りに水をのまするをひしとつ
つや、只、胸下るとのやいひて、今は只、白く
赤らみたる血と肉をのみ下すなれり。如
何に人雨然心の言を、御明なれはとて、此
に

にあはくあまやまぐ振舞ひぬと、
おろくとさすりぬ。まかつ、今を
るはありにこそあせるにや、何ぞ知らぬ、
りて致せりや、風上に置ても、
こゝろのいにもあはれ、
此を正してぬと、
此の世も、
りに、
りに、
ら。いかに、
ら。いかに、

(御風川箋)

ひあつた。そして其の痛感に徹した
 地獄よりとる業ありともあつた
 様のはかりは、^{おのれ}おのれが下さるよせと
 二つ三つと言葉は、その時始めて
 心の底より叫ばれたのであつた。
 あるほどの結果から見れば一茶はそのかゝり
 して救われたのである。しかし、一茶の方が
 らすれば、救はれると云ふ事から伺はるはあか
 った。あつた。救はれぬ自分、と云ふ事から
 いふに、^かその痛感に徹した時、^か期せぬして彼のた
 りしひの上に不思議な安んじが得られたの
 であつた。そしてついに、^か彼は

「然る時は、あなたから作り直して下さる御申しに
 及ぬが。願はるるも申は守りたしやうし。
 是れ即ち其の業の安んじとは申すたのり
 と云ふ精神的な信心を手に持つてやうにや
 ったのである。」

おのれが下さるよせと
 おのれが下さるよせと
 おのれが下さるよせと

(御風用箋)

中ねどど一茶のおうした心持か、溜ふとこ
 りのとうとあれ^しの心持であつた事は、ま
 た云ふまでもないことである。それは決して
 溜ふところの捨て舞の気持であつた。
 捨て舞の気持は、まゝ対他的である。一茶は
 もうさうした^対対的の境^境、^境晩年の境^境
 に戻してゐた。他人のことか、世間のことよ
 りも、寧ろ自分らの思ひあはれの痛感^{痛感}が舞の心に
 一ぱいにあつてゐた。舞は此の自らの思ひあは
 の痛^痛感に激して、つひに一切を擧げて大

地にひれ伏したのちであつた。そしてそこに始
 めて不思議な心の安らかさを得たのちであつた。
 晩年の一茶は永い年月の同定ひついでにお
 た故郷に帰臥し、悪鬼の如く憎んで来た義弟
 とすうといつとあしに款むことの出来る好
 く矢野とあつてゐる^{あつた}。
 かくの如くして一茶のたゞしひは舞の舞
 けさと安らかさを得た。一茶の日記は、か
 の有名な七音日記^{七音日記}、^{七音日記}よか
 たけをもつても知らるゝ如く、それは直来^{直来}

舞母 (か)

と類例を是といはるゝの類例を是といはるゝ。か
 かしこの中にも、~~類例を是といはるゝ~~の類例を是といはるゝ。か
 の類例を是といはるゝ。か
 後の類例を是といはるゝ。か
 した一葉句集の序文にたの如く書かれた
 の。

「文政丁未の冬、身まぬれて後、教を
 けし人々、遠く懐き、~~教を~~に
 傳入、早くも、~~教を~~に
 傳入、早くも、~~教を~~に

かに、~~教を~~に
 かに、~~教を~~に

一葉の類例を是といはるゝの類例を是といはるゝ。か
 であつた。ゆゑにの如くに、~~教を~~に
 リ、~~教を~~に
 であつた。大自然

○
 には、~~教を~~に
 こゝろ、~~教を~~に

(御風用)

(字十二行十二)

女史女史は「ついでにそのあつたからはいえぬ。お
い」といふ御師の言葉によつて、不思議にも
肉體の苦痛に捨てられしあいの心の安らかさを
得たとてその御の心持が、いかにもよく一茶の
救ね方其の場とのと似てゐるであらう。

萬葉集巻第十六の巻頭に掲げられた櫻白の傳
説

○

ツヤ女の傳説は、私の好きな傳説の一つであ
る。

昔者、娘ありけり。字をば櫻白と曰ふ。
于時ニ壯士ありて、共に其娘を、而し
て身を捐て、格闘し、死を令じて相闘たりと。
於是、娘を數えけらる。古より以來、一女
の身、二門に往くといふ事を傳へたり。今
壯士の志を和らぎ難し。其女死りて相害し
を永に息めんとす。女死りて相害し
申に入り樹に懸り、死にゆく。其兩壯士、
傳

(御・風用箋)

(字十二十一)

33

血正連禊に敢へた。名心緒を陳べて詠める。

歌二首

春の来らば神頭ニせむと我が思ひし櫻の葉

は散りにけりあはれ

妹が名に懸りあはれ 桜花はあはれにわが思ひ

毎毎年に

更にこんお風にも

或曰く、昔三男ありて同に一女を嫁ひき。

娘子は女をば懸りてり子。嘆息せらる。一

女の身滅ぶることあはれの如し。三城の土心平

山に石のあしと二つひて、さかになち

如上に行り水産に沈みたり。其は

士等哀歎之至に勝へた、又は所思を陳べ

て詠める歌三首

~~無耳のやし根めし吾妹子が来つつ~~

無耳のやし根めし吾妹子が来つつ潜かば水

は固めあはれ

足引の山緋の匂今往くと吾に4はりせば早

く来りしを

足引の山緋の匂今往くと吾に4はりせば早

(字十二行十二)

(御風用箋)

34

解

恒んが果てに彼女やぶあらしを無くすること
 よつて一切を救はうとした——その美しき
 大よしい生き方がある。そしてそれと同
 時にこれは此の傳に心ひかれる。説が既に上代
 の人々の品を好ましい傳説の一つとし（我國）
 て空に語りひろめられ、話材であらうといふ事
 實に、深く心を動かされるのである。
 此の傳説のものは或は外傳から来たもので
 あるとさしやうを考へても出た事か
 らか、いふまでもない。

(字十二行十二)

(御風用箋)

つまにけむ
 以上の二つの傳説の外に、かの古事記の牛島奈
 の傳説がある。これといつれも大同下統の小異はあ
 る。これは或は一つの話であつた
 のか、知らぬまい。たかそやうな事柄は私
 は今尚ほにしようと思はぬ。
 左の今の私にとりて此等の傳説の興はあ
 る。一人の少女が多くの男から求婚され、
 同時に男達の間に命がけの
 争ひすら起りつゝあるのを知り、
 幸ひす。

此のやせの美しい死の因る妻も所を、
 人によつてはひたすらやせの跡にのみ帰す
 るか知れぬ。意志の薄弱から来た絶望的
 行爲に外ならずしてかそれとぬからやうに断
 り去るかも知れぬ。いかに、かはとうもそ
 れたけは清き事とは出来ぬ。かはたける
 やせの思ひに選んた生か方に、か積極的の意
 義を認めたいのりある。か貴い煩悩
 一人のやせを中心として、多くの男の煩悩
 か、か望みか、怖ろしい渦を捲き起した。怖ろ

しい人向の執着の中間がかせうた。やせにと
 りては始めのうちは、この男もやせの愛の対
 象として考へられたるやうゆれも、か時を
 経るにつれていつれの男もやせにとりては執
 着の機化としてよう外思へぬおくあつて来た。
 深く且清いる心は、ひたすら其の執着
 すること執着との中心の怖ろしさに標はえた。
 「あゝか、こゝれか」とらふかうな味ひは、
 とりてはもう問題におくあつた。一人にか対す
 る愛あつて、からまは、からまはとてやせの心

(御風用)

(字十)

36

に強らあかつた。独女はたあまりに野やかに見つけられた執着の心は、**64** 怨の闘いの怖ろしさの爲人間そのものめに苦く人だ。独女の自殺は、その時思ふべき女の果てに、独女に異へられた第三の、そして唯一の生り方は外あらあかつた。それは自らを殺すことにはよくして、本考に自らを生かす道であつた。さらより、来一女の身、二門に往くといふ事を聞かぬ、かて仕士の意和平に成し、妾死りに相違ふ事を永に自ぬめあむに如かいかうか

か上代人はその刹那の独女の心を説明してゐる。「一女の身成易きこと、**64** 怨の志、平心成すこと、石の如し云々、かうも説明してゐる。その場合に於ける独女にとりこの大事が**64** 怨の心の中心をとり、かてていふ事であつたと見る点に於て、ゆが上代人は一致してゐるらしい。今テの私にとりこれ上代人のその考へ方が、此上よく懐かしく思ふく思はれるのである。」

自分か此世に在る間は男たぢの心は永久に

(御風用箋)

2-97

知らぬかあるにあらう。そしてその事は同時に
 自分に降りても苦くぬる。如か自ら
 退け自らを無くす。ことにあつて相害ふこと
 を永遠に息女せあらめさせんには——そこま
 だ世の女は我か代人の老くあは
 義を辿り入った我か上代人の心を、私はとう
 しても懐かしままには居られぬ。御筆の心
 眼に映いた一人の可憐な少女の死は、決して
 單なる絶望的自棄のほあつた。それは永遠

に人と人との争いを息めさせたいと
 の現れであつた。美しい死であると同時に、
 貴い生であつた。それは弱さの極致に
 強さの極致を示す生と死の極致に
 あり、これかの選擇に向つて強く突進
 して他を顧みないといつたが、生と死の
 女に中するさめ居た。ことは生と死の
 として、その女が死する現世には強い生と死の
 ると云ふ人があつた。知れぬ。しかし、さ
 うした自他対立の境地

には、生と死の間に、戦ひがある。

36

常教が是れなるが、人の心は動かし所以に、^{常に}自他
 対立の境を絶した生きたるありたいありある
 増み、根み、翳しみ、怒り、焦り、苦し
 め—さうした心の底に、一種の静寂と天地
 かの。その天地に^入ると、そに此世の縛
 れの本者の糸口が見えて来る。自分^が地に責
 仕をおしりつや、他を憎んたり、きめた
 り、怒んたりする事の代りに、自分が全きま
 仕を肩^おうにやる。凡このまは一身に背
 負つて、凡この人の為めに祈り、凡この人の
 為めに念ふ頼^すは居らんおくある。され二
 そを本に苦しみ、真意に悲しむ者^の
 ことの出来る天地である。ちまた^の自己の
 事を^に徹した^は、^{天地}の事を^に徹した。天地である。
 たかおりや、自負や、自恃^をを捨て去つた、
 本者の弱さ、本者の謙虚に徹して、一切を夢
 けて大地にひれ伏した者の入り得る天地
 である。凡この縛れ、凡この罪、凡この苦し
 凡この悩みのまよと、此の自分の^まにあ

責任

(御風用)

(字十二行十二)

9

つたことを悔感する者やその入り知る天地
あり。

「女の身成易きこと三女の志
平~~平~~氣^平こと一の如し」
三女の志
謙虚お心であつたらう。かくてつひに女は
その西路と歎いた一身に凡^れ人の世を替へつ
て死んで行つた。あつた。妾死して相違ふ
事を永に自らめむ。かゝる中女いふ事、
女は永永遠の生を望むたの事であつた。

私は萬葉集の此の歌に傳はるるに
いふことと感ずるは同様に、その傳説を通じて

いみしくも語られてゐる。我か上代人の心を、
たゞの女もよく慕はしく思ふのである。

○ 永土遠の唐女物の語は、
萬葉集に記されてある。傳はるるに

傳^傳中のたの一章を詳相させた。
保延七年辛酉の春の比。時國(澁間)夜討
の爲に殺さる。其敵は伯耆守源長
明か息男明一右の原内武者所止明なり。告

(御風用箋)

40

の由来は、定明梅岡の庄を知行して、又々の
 年月を送るに、時國下事の身として、定明を
 おるに依り、遂に對面せしむ。其時相
 リとぞ。其夜九歳の小童、小竹筒を以て敵を
 射るに、定明が目の間に立つ。此疾により
 て驚れんことを思ひ、即遂に散り。見
 聞の上下、驚き、事と成りし。時の人
 みよ小童を呼て、小竹筒と云ける。時國大
 事の疾を蒙りて、今を最の時、九歳の子に
 向て遺言すらく。我死去の後、世の風儀に

隨て、敵を恨むることあらぬ。此偏に先
 世の報あり。若此讎を報んと欲は、世世
 生生りに善心を懷て、不在所に輪廻する
 ことあらん。生ずる者は皆死を恐む。然
 るに更に限あり。我此疾を痛。人何を痛むら
 ん。我此命を惜。人豈惜むらんや。我が世
 をもて、人の思を知し。然則一向に尊自
 他平等の法を修り、双の眼を閉じ、款疎同
 菩提に至らんことを願ふ。言をけりて
 心を安し西に向て、其時念佛して、眠加

40

(御風用箋)

(字二行十二)

即ち
カキ
代の

かく分終し給ひなり。

此の文章の名は勢至丸と云つた。此の勢至丸

が勢至丸は然る人であつた。

これは此の勢至丸出づかの動機について考へる

度には、彼の父が國が彼に貴した言葉によつて

彼は、彼の父の國が彼に貴した言葉によつて

あゝか、三増更にそれが、言葉によつて

たか女梅屋の傳説中の、女の梅屋のしを

した言葉と、一紙の相違を、そのしを

ことを思ひはかみ人といふ、これはこれである

つれなく、新たを感激を、世にあらたのあ

時、國も梅屋の國から、世にあらたのあ

始めて自己の、世にあらたのあ

こゝであつた。梅屋、世にあらたのあ

救は、世にあらたのあ

れたの、世にあらたのあ

を一身に、世にあらたのあ

に梅屋、世にあらたのあ

か、世にあらたのあ

41

ここに梅屋の、世にあらたのあ

雪は流れて行く。静かに落ちよく流れて行く。
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 く。 ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 えて行く。 ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 まい ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 を自然の待つてぬ。 焦つたり、おめたりし
 よくても、素の時に素の来る。
 静かなはせば、その自然の心に従つて ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇
 はせらる。 伸まはもた肩の ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇
 黙つて居る ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 申 ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

らかに一切を毒あせてぬ。 投げ出してぬ。
 しかし、生ずるぬ。 かけ生ず、伸ぶるぬ。
 け伸ぶるぬ。 雪にあり、かけの生
 命力を以て生ずるぬ。 しかし、一寸の執着
 を持つてぬ。
 雪の中であらうと何となく春らしき感じを興
 へる此の場の ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 高い梅を ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 のよしの並木を眺める時、 ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 やしいぼろの快き ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 を ~~〇~~ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 (御風用箋)
 せんしみの

せんしみの

名を以てし
を御かと思せよ
待てにせよ
に御事奉るを待てよ
決定の事ありて思ふが、
運命

は運命にあり。自由意志あると思ふが、
見まいが、生(生活)は生(生活)ある。望んむと
おくても、精(精神)つた世はいつとありに
行く。待つ者にも待たぬ者にも、ひとしく春
かい。待つてまわる。

御事奉るを待てよ
○
御事奉るを待てよ

期間
とに立ちあふ冬を持つた國の住民の
ては、
はそれについて考を
いたし生活をの
たとか、
ある生活

(御風用)

(字十二行十二)

ら第三者の観点上の解釋に過ぎない。實際
 それを望んでゐる者の気持からすれば、それ
 は決して戦ひるはあ、随て征服してあ、
 奪うべきとした逆らふ気持をけるは、利権者
 であるといふべきであらう。さういふところ
 であらう、歴服されてゐるのもそれはあ、
 歴服とか歴服とかいふこと、戦ひ、争ひ、
 逆らふといふ事から来るのだ。争ひは戦ひの
 ありとてころに、歴服の事、理由が
 あり。またそれは決してあつてゐるべき
 であらう。

あつて、歴服はゆるがせだ。しかし、事はそれ
 と及ぶべきであらう。
 私はその北國人の歴服に生ずる気持を、
 自然との合致だと云つた。さういふところ
 方があつてゐると思つてゐる。聊かの思ひ
 氣持がある毎年々々御等
 心を迎へて送る気持
 には、思ひくともあれのが聊かあ、さう
 することと出来あつてさういふ思ひくすら
 もあ、待たせたい、拒みしあ、御等は

(御風用)

たいそんは應^{いた}ある等自身^の生活^上の要^要に
 にいそしむはかりた。又そんもの^に対しては
 徳等の心は極めて安んずる^然はかうした
 氣持^の持する者に、不思議に^たなる^又其^のて
 うゆる。私は今^今書すと^今いふ^今其^の本^を使つたか、
 それは^対他の^とて^いふ^かう^なる^事で^いつた^の
 にはあ^い。そこ加^加減^減せよ^ところ^をあ^い。
 〇

かうして^私達^のあ^から^く理^もれ^てめ^た得^るか、
 矢張^私達^の心^に別^別段^段の^まま^まを^いふ^たま^まに、
 〇

おのれ^のこ^のり^とか^へて^行く。私^達の^方に^も
 亦^亦「^そら^二書^が」^二つ^の間^にか^降る[」]「^そら^二書^が」
 かける^る「^とて^いふ^風に^無常^と進^立た^しく^書を
 の^れを^向題^にす^るこ^とを^いふ^に、^いつ^とあ^い
 に^書ら^うい^い氣^持に^多り^書つ^て行^く。そ^して^久
 し^おり^ては^踏む^から^うに^ある^こと、^その^上で
 踏^つ土^をこ^の目^にい^はる^の歡^心を^興え^る。こ^のか
 し、^それ^たか^らと^いつ^て私^達は^二書^を踏^むか^つて
 吹^つて^ある^のに^あい。何^のの^のあ^るか^のの^あ
 に^吹か^りで^るか^らか^ら二^書を^踏む^かつ^てい^ふ、
 (字十二行十二)

(御風用箋)

48

私達はかほりつらふにいらぬ様いさと歎ひと
を感じたのちであった。

○

『うまきうまきかぶりりりり』と「茶は
かう飲つた。今の子供は二の甘うにうらや。

あそんた

あそんた

あだちとあそんた

あま良つとあそんた。

更にこん 風にもうた。

降つたあまきえれ

くるあまきえれ

あつたあまきえれ

降つたあまきえれ

あつたあまきえれ

北國の子供はあまきえれを食ふこととすらすらとまを
ひる。

○

あまきえれとゆく。
あまきえれとゆく。
あまきえれとゆく。
あまきえれとゆく。

る。(四月一日)